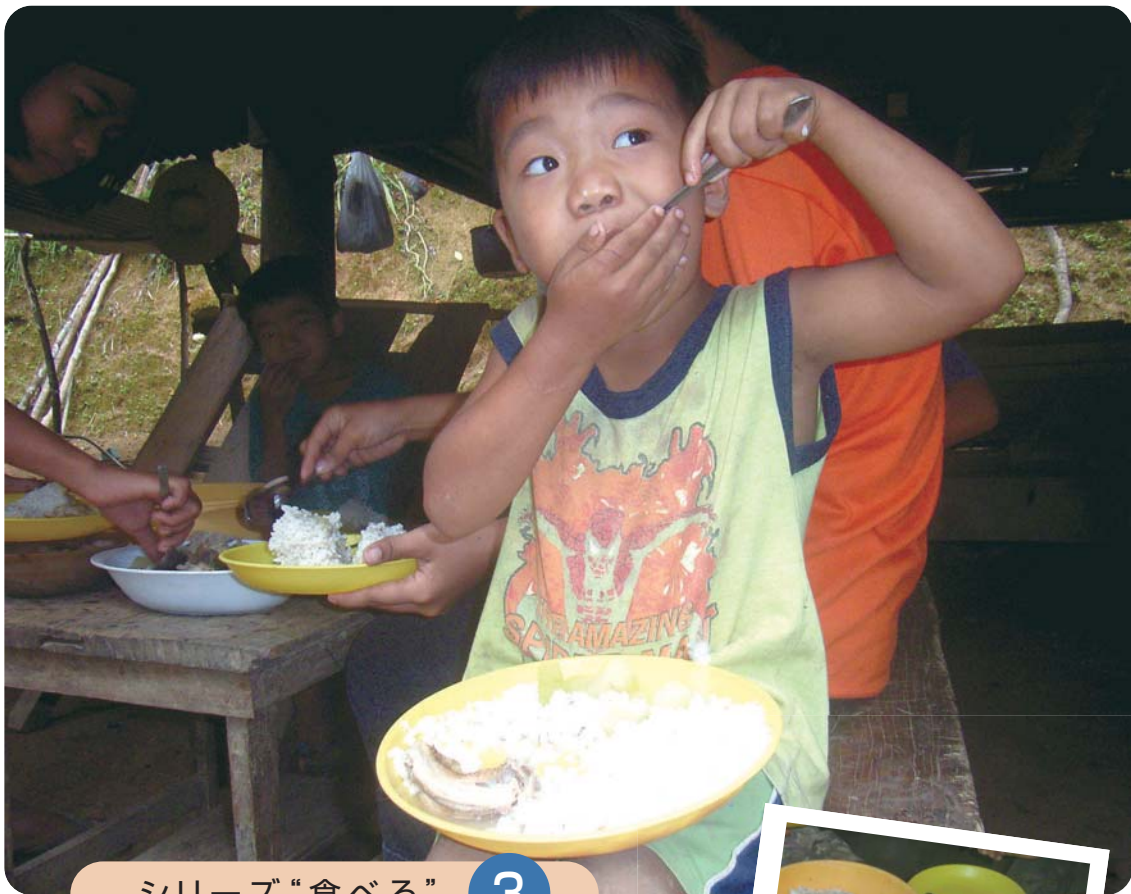


チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2008年11月NO.14

SMILES

<http://www.childfund.or.jp>



シリーズ“食べる”

3

フィリピンのルソン島北部の山岳地帯イフガオ州に住む子どもの朝食。
棚田を利用した米作がさかんなこの地域では毎日お米を食べます。
今日のおかずは鶏肉とパパイアが入ったスープと、ヤマイモを茎や葉と
一緒に蒸したものです。塩味だけの素朴なメニューですが、
1日をスタートさせる大事な食事です。



写真：センター28（イフガオ州ラガウェのブヤブヤン村）

ChildFund
Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、
アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、
家族と地域の自立を目指した活動をしています。

特集

「日常」を取り戻すために
～緊急支援活動の充実を目指して～

スポンサーシップにおける緊急支援の取り組み

日本にやってくる台風の多くはフィリピンの東の太平洋上で発生します。フィリピン東海岸に位置する協力センターは、発生したての台風により毎年のように被害を受けています。農作物が壊滅的な被害を受けたり、チャイルドの家が半壊や全壊するなどの被害が発生することもあります。チャイルド・ファンド・ジャパンも、スポンサーシップ・プログラムの枠組みの中で食糧の配布や家屋の修繕といった緊急支援を行ってきました。

台風被害に対する支援ではありません。1990年フィリピン北部を襲った大地震では、最初の協力センターがあったバギオに大きな被害をもたらしました。この時には支援チャイルド以外の被災者も含め、食糧や医薬品の配布、家屋の修繕といった緊急支援を行いました。

また、1991年のピナツボ火山噴火の際には、当時の支援地域のサンバレス州ボトランで、被災した人々の再定住地支援も含めた救援と復興支援を行いました。

ただでさえ、毎日を必死に生きているチャイルドたちや貧しい人びとの生活が台風、地震、火山噴火といった自然災害により一瞬にして破壊されてしまう姿を、私たちは目の当たりにしてきました。

緊急支援活動の広がり

これまでの緊急支援活動の経験を通して、実践しています。

学んだこと

1. 被害状況の把握、緊急支援活動の組立て、必要な緊急物資や資材の調達及び移送、さらには配布というプロセスを出来るだけ短時間で行う必要がある。
2. 緊急支援は生活に必要な水や食糧、医療サービス、住む場所をできるだけ早く提供する救援活動だけではない。災害などで受けた心の傷を癒す支援や、日常生活を立て直す復興活動等、包括的なアプローチが必要である。



チャイルド・ファンド・ジャパンが行った主な緊急支援

1990

バギオ大地震被災者への緊急支援

1991～2

ピナツボ火山噴火による被災者への緊急支援

1992～5

ピナツボ火山噴火による土石流被災者への緊急支援

1995

台風被災者支援

1998

干ばつ被災者への緊急食料支援

19

台湾大地震緊急支援

1990年 バギオ大地震

1990年7月、フィリピン、ルソン島北部を襲ったM7.7の地震は北部都市バギオを中心に大きな被害をもたらした。死者・行方不明者は2,000人を超え、バギオに至る3本の主要道路は全て寸断された。



地震で崩れた建物



医薬品を国立バギオ病院に寄附するスタッフ。政府から救援物資が届いていない地域へ、米、油、缶詰などの食糧を届けた。

1991年 ピナツボ火山噴火

1991年6月、フィリピン、ルソン島北部に位置するピナツボ火山が20世紀最大と言われる噴火を起こす。周囲150キロに飛散した噴石や火山灰、さらにその後数年にわたって続いた土石流被害により、被災者は120万人を越えた。



腰の高さまである火山灰流の中を避難する人々。食糧、医療支援を中心に、土石流による二次被害の可能性のある人々へ、再定住地支援を行った。

今年の夏、日本では「ゲリラ豪雨」という言葉をよく耳にしました。予測が困難で突発的な「ゲリラ豪雨」は局地的に大きな被害をもたらすことがあります。「ゲリラ豪雨」の報道に触れるたびに、事前の情報提供と備えがいかに大切か痛感します。チャイルド・ファンド・ジャパンは、33年に及びフィリピンでのスポンサーシップ・プログラムの中で、緊急支援も手がけてきました。今号は、これまでの経験を通して緊急支援について特集します。

より効果的な支援を行うために

こうした体制を整え、緊急支援の実績を積んだとは言え、課題がなくなった訳ではありません。記憶にも新しいスマトラ沖大地震のような大きな自然災害に対し、組織として迅速に支援を行うためには、緊急支援の枠組みやそれを実施するためのガイドラインの文書化などを『平時から準備する』必要があると言われます。しかし、チャイルド・ファンド・ジャパンは、緊急支援の方針、方策、手順を記した計画がまだ整備されていません。また具体的な活動に携わるスタッフが知識や技術を身につけるための研修が十分に整っているとは言えません。

緊急事態が発生しても被害を最小限にする仕組みづくりや、チャイルドを含め被災した人びとの生活を少しでも早く立て直す支援活動の組み立てが必要です。チャイルド・ファンド・ジャパンはこれからも緊急支援への対応能力を整える努力を続けていきます。

私たちは主に2つのことを学び、

対応策

1. 迅速に対応するために、台風被害を多く経験する支援センターは備えとして「緊急支援用の予算」を確保することに。さらに実際に緊急事態が発生した場合、東京事務所の承認を待たずに、フィリピン事務所が協力センターに10万ペソ（約25万円）まで緊急支援向け送金することを認めている。
2. 2006年の「ジャワ島中部地震」では、被災した子どもたちの心理的なケアを目的とした「チャイルド・センタード・スペース」の設置に力を注ぐ。



99

被災者への

2000～1

武力紛争避難民への緊急支援

2003

エチオピア栄養不良児への緊急食糧援助

2004～5

大型台風緊急支援

2006～7

インドネシアおよびスリランカにおける津波被災者の復興支援事業
インドネシア・ジャワ島中部地震の復興支援事業

1995年 台風「ロシン」被害

1995年11月フィリピン、ルソン島ビコール地方を襲った台風「ロシン」は1,000人近い死者を出し、被害総額は9.3億ペソ（約20億円）にのぼった。



強風で横倒しになった家（ナガ）



食糧、薬、家屋の修繕資材などの緊急支援物資を運ぶスタッフたち。

2006年 ジャワ島中部地震

2006年5月にインドネシア、ジャワ島中部でM6.2の地震が発生。死者は3,000人を超え、負傷者は2万人とも言われる。震源地では、レンガを積み上げただけの耐震性が弱い家屋が多く、被害が大きかった。



壊れた自宅の前を通る子どもたち



被災した子どもの心のケアをするチャイルド・センタード・スペースを設置。子どもたちがスムーズに学校生活に復帰できるように、先生への研修などの支援を行った。

スポンサーシップ・プログラムを実施している協力センターでも緊急事態に対する対応能力の強化に努めています。昨年 8 月には、フィリピン事務所が協力センターを対象に、台風などの自然災害に伴う被害の対応について研修をしました。その研修を受けた後、実際に台風被害に遭ったセンター 21 のセンター長に経験を語っていただきました。

台風を経て結束した人びと エスター・アルコンガさん(センター21 センター長)

2008年5月17日…

台風「コスメ」(日本では台風 4 号)がガルソン島北部を襲いました。被害を受けたセンター 21 では、支援を受けている 343 名のチャイルドのうち、11 人の家が全壊、34 人の家が半壊しました。また、台風によって生活の糧を得る手段(主に漁の舟や道具など)を失ったチャイルドの家族も多くいました。



Ester Ma. A. Alconga



ゲームを使って被災したチャイルドの心理的ケアを行う
(中央がセンター長のエスターさん)

再生にむけて

しかし台風が去った後、人びとは生活の立て直しに全力を注ぎました。教会や親戚の家などに避難していた人は、自分たちが住んでいた場所に戻り、家から荷物を出して干し、仮設の家を作りました。漁の網を直して再び漁に出たり、畑を整えて作物の種を蒔きました。

私たちセンターのスタッフも被災しましたが、地域の人びとが 1 日も早く元の生活を送れるよう、被害の把握や復興支援活動の組立てに努めました。それには昨年、フィリピン事務所緊急事態への対応強化のセミナーで学んだことが役立ちました。例えばセンターでは、従来の食糧や医薬品の支給や家屋の再建の他に、被災したチャイルドの心理的ケアを行いました。それは出来事の再構成、感情を発散することによりトラウマなどの心の傷を予防するものです。

また私たちは、防災及び災害に遭った時にどのように対応するかについてのセミナーを主催し、支援チャイルドの家族や地域の人びとと共に、台風被害の体験を無駄にしないように話し合いました。中でも、誰が緊急支援を先に受けるべきか、その基準について話し合い、地域の住民で合意ができたことは大きな成果でした。そして、この経験を経て人びとの結束は台風の前よりもより強くなったように思えます。

心の緊急支援

チャイルド・ファンド・ジャパンは、災害後の早い段階で、マニラにある連絡調整事務所から松浦宏二さん(プログラム担当)を現地に派遣して、状況の把握に努め、現地のニーズにあった現実的な支援を行ってくれました。また、物質的な支援だけではなく、松浦さんの訪問は、「スポンサーの方が私たちを心配してくださっている」「私たちは忘れられていない」と、不安のどん底にあった多くの被災者を勇気づけ、復興と希望への精神的な支援にもなりました。



災害からどのように地域を守るか、話し合うチャイルドの家族たち



チャイルド・ファンド・ジャパンの支援で再建した家屋の前に立つチャイルドの家族とセンター長(中央)、センタースタッフ

嵐の後で

台風は去り、子どもたちには笑顔が戻ってきました。被災した人びとも再建した新しい家で、新しい生活を始めています。私たちは被災前の状態には決して戻れません。けれども台風は私たちに災害について考える機会を与えてくれ、そして逆にこの経験を通して私たちは強くなりました。

支援とお祈りをくださった日本の皆様にご心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

より良い緊急支援を目指して

～3ヶ国合同緊急支援ワークショップ～

団体として緊急支援の課題に取り組むため、2008年10月下旬に日本の事務局、フィリピンとネパールの両事務所からスタッフが14人マニラに集まり、能力強化のためのワークショップを行いました。「チャイルド・ファンド・ジャパンにとって緊急支援とは」「通常の支援活動とのバランスは」「もっと迅速に支援を行うためには?」「子どものための緊急支援とは?」など、他の団体の事例も学びつつ、連日遅くまで白熱した議論を展開しました。

このように海外事務所のスタッフを含めた大きなワークショップは初めての試みでしたが、全ての参加者が緊急支援に対する理解を共有し、深めることができました。また、同じテーブルに座って学ぶことにより、支援する国や国籍が違っていても皆チャイルド・ファンド・ジャパンの仲間であることを実感し、より良い緊急支援を行いたい、ひとりでも多くの子どもを救いたいという気持ちに違いはないのだと再認識しました。

これから各事務所は、このワークショップを通して浮き彫りになった課題を検討し、緊急支援の方針・方策・手順を記した計画作りに着手します。より良い緊急支援体制作りに向かって確かな一歩を踏み出しました。(総務グループ 猪又佐奈江)



「災害時にこそ子どもは守られなければいけないね。そのための手順を決めなくては。」「被災地に入るスタッフの心構えを記したものも必要だね。」(左端が猪又)



ワークショップに参加したスタッフと講師のみんで。実際に災害が起きたことを想定したシュミレーションを行いながら、各事務所では整備しなければいけない事らについて考えました。

新連載 スリランカから vol.1 アーユボーワン



あれっ、チャイルドの名前が違う!?

アーユボーワン：シンハラ語で「こんにちは」

手紙に書かれているチャイルドの名前、私のチャイルドと違う!?実はこれ、よくあることなんです。スリランカでの名前のつけ方、呼び方は日本とかなり違います。例えば、多数を占めるシンハラ人(主に仏教徒)の場合、正式な名前は、居住地・職業などを示す「添え名」、その人の「名」、それから「姓」の3部から成りますが、チャイルドとしてコンピューターに名前を登録するには、字数に限りがあるので、一般的には「添え名」と「名」もしくは「姓」と「名」だけを登録します。「名」が2つ以上に分かっている場合は、最初の部分だけを登録します。日常生活でも、正式な名前は長く不便なので、公的な書類を除いては一部だけを使っています。タミル人(主にヒンドゥー教徒)やイスラム教徒でも、それぞれ名前のつけ方が異なり、文化や慣習の違いを感じさせます。見覚えのない名前でお手紙が届いても驚かないでくださいね。なが〜い正式な名前のうちチャイルド名として登録されていない部分が登場したというわけなんです。

なが〜い正式な名前 (シンハラ人のヒルニちゃんの例)



プロフィール



チャイルドから届いた手紙

オカルドゥンガ地域病院事業 [病院事業の視察]



ネパール

- 【ネパール】
 - ▶ 保健行政システムのキャパシティ・ビルディングによるネパールの女性と子どもの栄養改善計画
 - ▶ オカルドゥンガ地域病院事業
- 【フィリピン】
 - ▶ パラワン族生活改善プロジェクト

- 協力期間: 1996年7月中旬～2011年7月中旬
- 支援対象: オカルドゥンガ郡(人口約17万人)と近隣5郡の住民
- 協力団体: UMN (United Mission to Nepal) Hospital Support Office

今年5月に、オカルドゥンガ病院事業の現場視察をしました。病院へは小型プロペラ機でも行けませんが、今回は首都カトマンズからオカルドゥンガ郡の西側まで車輜で1日移動し、その後徒歩4日間かけ地域保健事業を視察しながら病院に向かうルートをとりました。

活動地域のナラマデスワール村では、子ども、若者、女性たちがグループ毎に保健衛生の啓発ソングを作り踊るといふ保健ソング大会が行われていました。炎天下、色鮮やかな衣装を身につけ化粧をした少女たちが、一生懸命裸足で踊りました。このように、村人が楽しみながら保健衛生知識を身につけていくような工夫が事業でなされていました。



保健ソング大会で踊る少女たち

隣のシンガデビ村では、建設中の石造りの幼稚園から出てくるカマラ・カドゥカさん(25歳)に出くわしました。彼女は、公立小

学校のボランティア教師で、2年前に地域保健事業が結成した母親グループの元リーダーです。事業スタッフの指導を受け定期的に村の問題を話し合った彼女たちのグループでは、小さな子どもたちが遠くの小学校まで毎日通うのは大変なので、地域住民からの寄附を募り、最近幼稚園を完成させました。「大変な仕事だったけれど、皆で力を合わせればできることを証明できてうれしい」と語ってくれました。このように、地域保健事業が母親たちの力を引き出し、自分たちで村を良くしていく好例も見ることができました。今回は、標高1000mから2000mの間を何度も登り降りする厳しい山旅でしたが、病院からの報告書からはうかがうことのできない、生きた事業成果を確認することができました。



母親グループが建てた幼稚園とカマラさん

(ネパール事務所所長 田中真理子)

保健行政システムのキャパシティ・ビルディングによる ネパールの女性と子どもの栄養改善計画



ネパール

[ラスト・スパートに向けて ～プロジェクト・マネージャーの交代～]

活動の一部をJICA草の根技術協力事業(パートナー型)として実施

- 協力期間: 2006年10月1日～2009年9月30日
- 支援対象: ネパール保健省、中部・西部地方の5郡の全保健行政スタッフならびに女性地域保健ボランティア
- 協力団体: ネパール保健省・NPCS (Nutrition Promotion and Consultancy Service)

チャイルド・ファンド・ジャパンが実施してきた栄養改善の取り組み*を、ネパールの行政システムを通じて継続・普及することを目指して開始したこのプロジェクトも、事業期間を残すところあと1年弱となりました。*ネパール「栄養改善事業」:2000年7月～2008年7月に実施。

これまでの2年間、対象5郡の様々な立場の保健行政スタッフへの研修を順次進めてきました。初期に活動を開始した郡では、郡保健事務所が独自予算で栄養不良児を救済したり、地元で入手可能な大豆、トウモロコシ、小麦を配合した栄養補助食の作り方を教わった地域の母親が、協同で手作りし始めたものの販売を支援するなど、子どもと母親の命を守る新たな展開が芽生えています。

研修が軌道に乗ったこのタイミングで、プロジェクト・マネージャーが交代することになりました。チャイルド・ファンド・ジャパンが初めて公的資金を活用する事業の実施に向け、ネパール政府との手続きに始まり、一時は緊迫した社会情勢下でこれまでの活動を進めてきた吉田希から業務を引き継いだのは、松浦宏二です。

松浦は、CCWA時代に遡る1989年から海外事業を担当し、フィリピン、スリランカ他各国の事業、緊急・復興支援事業の展開、

ネパールでは活動開始時の事前調査等を担ってきました。これまでの険しい道のりを経て、吉田がプロジェクト・スタッフと共に築いてきた活動が、ネパールの保健行政にしっかりと引き継がれるよう、渡されたバトンをしっかり握り、ゴールに向かって走り始めました。

この事業のさらなる支援のため、2008年度冬の募金キャンペーンを予定しています。最低限の保健サービスすら受けられないネパールの女性や子どもたちへの支援に、ご協力をお願い申し上げます。



新旧プロジェクト・マネージャーとプロジェクト・スタッフ(後列右端から吉田、松浦)

「海に囲まれたフィリピンと山に囲まれたネパール。カトリックの影響が深く残るフィリピンとヒンドゥー教、チベット仏教の影響の強いネパール。それぞれ社会や文化も違いますが、子どもたちが抱える問題は同じです。栄養改善事業を通して、ネパールの行政官やスタッフと共にこの問題に取り組んでいきます。」(松浦)

* ハロハロとはタガログ語(フィリピン語)で“いろいろ”“まぜこぜ”という意味です。
このページは読者の皆様からのリクエストや投稿などをもとに作るページです。

ハロハロのページ

体験 チャイルドたちの生活! スタッフの取材ノートから

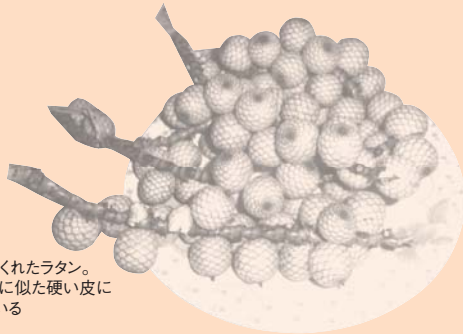
フィリピンで28番目の協力センターであるカタグワンセンターは、東京にある事務局スタッフの中では訪問するのが一番大変なセンターのひとつとされています。ルソン島北部のコルディレラ山脈の奥深い場所に支援地域があるからです。雨季を迎えている首都のマニラからバスで8時間、ラガウェの協力センターを訪ね、チャイルドの生活取材したスタッフが、体験したことをご紹介します。(募金グループ 東方信也)

なが〜い山歩き

チャイルドたちが生活するセンターの支援地域に行くため、町から蛇行する山道を車で45分ほど移動しました。車を止めたスタッフは「さあ、ここから大変になるよ!」と言って歩き出しました。その言葉どおり、そこから3時間、人がすれ違うことも出来ないほど細くて急な山道を、汗をかき、泥だらけになりながら進みました。途中で小学生の男の子とすれ違いました。スタッフと言葉を交わした少年は、汗だくで重装備の自分とは全く対照的に、涼しい顔で急な山道をサンダルでひょいひょいと下って行きました。スタッフに聞くと、彼は下校途中だと言います。この地域では、学校まで1、2時間かけて山道を通うことが当たり前だそうです。厳しい生活環境の中で生きている子どもたちのたくましさを垣間見ました。



苦勞して下った急な坂道



スタッフがくれたラタン。
蛇の皮膚に似た硬い皮に覆われている

不思議な果物

こんなに長い山歩きを予想していなかったため、持っていた1ℓの水もすぐになくなってしまいました。買おうにも山の中では売店もありません。喉が渴いて困っている私を見て、スタッフがラタンという名の果物をくれました。初めて見るラタンの味は少し甘いレモンといった感じで水分を多く含み、乾いた喉を癒してくれます。自然の恵みに感謝し、山岳地帯で生活する人の知恵に感激しました。

早寝早起き

チャイルドたちが生活するこの地域にはホテルなどはもちろんありません。スタッフの親戚の家に泊めてもらいました。電気がきいてないため、夜は灯油ランプです。夕食後、夜具が整えられると、灯油ランプが消されます。時計を見ると午後8時。静寂の中で横になっているうちに、山歩きの疲れもあり寝てしまいました。翌朝起こしてくれたのは、目覚まし時計ではなく、ニワトリの鳴き声! ととも早起きことができました。



ピンを利用した
手作りのランプ



チャイルドがくれたニワトリと共に

チャイルドとの別れの時

訪問を終え、町に戻るために挨拶すると、チャイルドがカゴを持って来ました。カゴの中には、な、なんと生きたニワトリが! この地域では来客があった時、ニワトリをお土産としてプレゼントする慣例があるそうです。「フィリピン・ホスピタリティ」という言葉を思い出します。フィリピンの人びとの持つ「思いやり」の心を表した表現です。ホスピタリティの語源は「旅人の保護」にあると言います。もらった時は正直戸惑いましたが、旅立つ私への家族の暖かい気持ちに感謝しました。

たった数日間の滞在ですが、チャイルドたちの生活を体験して、山岳地帯の厳しい環境の中で暮らす人びとの優しさたくましさを感しました。物質的には恵まれていないかもしれませんが、けれども人々の心は暖かい気持ちであふれていることに改めて感動しました。2008年10月

インフォメーション コーナー

おしらせ

『チャイルドの成長記録のお届け』

フィリピンのスポンサーの皆様には、「チャイルドの成長記録」を10月末までにお届けいたしました。スリランカの「チャイルドの成長記録」も順次お届けしますので、どうぞ楽しみにお待ちください。
チャイルドたちの1年間の成長を、写真とともにぜひご覧ください。

報告

『つながりふるじえくとチャリティ古本市 2008夏！古本キャラバン』報告

8月25日から29日まで、キーコーピー株式会社、キッコーマン株式会社、株式会社ジャパンエナジー、日本たばこ産業株式会社、株式会社日立ハイテクノロジーズと協働して、チャリティ古本市を開催しました。今年も支援者の皆様からは約3,000冊の古本が寄せられました。ご協力ありがとうございます。古本市来場者の方々からも「良質な本が手頃な価格で手に入るこのイベントを毎年楽しみにしています。」とのコメントも多く寄せられました。古本の売上により、フィリピンの5名のチャイルドの支援が継続されます。



昼休み時の会場は特に賑わいました。

報告

『グローバルフェスタJAPAN2008』報告

10月4日と、5日に東京・日比谷公園で開催された『グローバルフェスタJAPAN2008』に参加しました。当日は支援プロジェクト紹介、ミニ講演とワークショップ(マイクロ・クレジットゲームに挑戦!)を行いました。ミニ講演では職員それぞれが心に残る1枚の写真とともに支援地域について話し、来場者との交流をはかりました。関東在住の支援者の方も来ていただきました。



ミニ講演をする小林事務局長

報告

アジアの子どもたちへの贈り物

さる10月9日逝去された細野雅央様から9,200万円のご寄附をいただきました。ご寄附は、細野様のご希望にそって、フィリピン、カンボジア、ネパールで教育環境を整備する事業で用いられます。建設される教育施設には記念プレートが設置されます。細野様とご遺族の皆様にお慰めがありますようお願い申し上げます。

～ 記念プレートより抜粋 ～

“私の願いを三つの漢字で表すことができます。その意味は、「一人でも多くの方が、秀(ひい)でて、雅やかに(和をもって)暮らす」です。妻(多子)、息子(秀光)、そして私自身の名前から一字ずつとりました。私は、障害の故に人生において幾多の辛苦を経験しました。その経験を基に、世界の貧しい子どもたちに思いを馳せ、明るい未来のため、子どもたちの教育の向上を切に願います。”

重要

『認定NPO法人』申請中です、認定され次第お知らせいたします。

『認定NPO法人』取得のための申請を昨年7月に国税庁に行い、審査が継続されています。『認定NPO法人』として認定を受けると、支援者の皆様は寄附金控除を受けることができます。認定の通知を受けましたら、皆様には直ちにお知らせいたします。同時にチャイルド・ファンド・ジャパンのホームページでも告知いたします。『認定NPO法人』についてのお問合せは会計・庶務グループの吉川(03-3399-8123)までお願いいたします。

感謝!

山形の中学生が事務所に来所

9月4日、山形県の鶴岡市立鶴岡第三中学校の3年生6名が、修学旅行の職場訪問の一環として、事務所を訪ねてくれました。活動についての説明を聞いた後、予め学校で呼びかけ集めた書き損じハガキ約400枚を寄附してくれました。「書き損じハガキがどのように使われているかがよく分かったので、これからも集めていこうと思う。」「募金活動にも積極的に参加していきたい。」と嬉しい感想が寄せられました。



書き損じハガキ贈呈の様子

ChildFund
Japan

Vision Mission

チャイルド・ファンド・ジャパンは
ここに掲げるビジョン(目標)、ミッション(使命)に
基づいて活動します。

ビジョン(目標)

すべての子どもに
開かれた未来を約束する
国際社会の形成

ミッション(使命)

生かして生かされる
国際協力を通じて
子どもの権利を守る

スマイルズ

<チャイルド・ファンドだより SMILES> 2008年11月発行

〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5

特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン

理事長 深町正信(青山学院名誉院長) 事務局長 小林毅

TEL. 03-3399-8123 FAX. 03-3399-0730

E-mail: childfund@childfund.or.jp URL: http://www.childfund.or.jp/

チャイルド・ファンド・アライアンス

ChildFund
Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う12団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。